佐藤嘉倫先生「多様性と多文化共生」への質問・コメント	
講義内容について	
質問	「多様性」や「多文化共生」は良いものだと思い込んで、それを実現すべきと考えてきたため、なぜ良いものなのか？から考えるのは面白かった。日本人は橋渡し型社会を築くのが苦手とあったが、欧米の人々はそれが得意なのか、また他に苦手なことがあるのかと疑問に思った。
回答	欧米と言っても色々な国がありますが、少なくともアメリカ人は得意なようです。マーク・グラノベッターの『転職』が参考になると思います。
質問	「多様性」の定義とは、詳しくどんなものか知りたい。たとえば、戦闘状態にいる小隊にも、頭がキレる人や、身体能力が良い人、勇敢さなどの点で、様々な人がいると思うし、地元の企業にも、理系の人もいれば文系の人もいて、外向的な人も内向的な人もいると思う。そしてそれらは時に、強みになるのではないかと感じた。「多様性」に不要、必要が生じるための特徴的な定義があれば知りたい。
回答	多様性の定義そのものが専門家の議論の対象になっています。本講義では人種やエスニシティによる多様性に議論を絞りました。
コメント	「多文化共生」と聞くと今までは無条件にいいことだと思っていましたが、今日の講義で新しい考え方を得ることができました。
	一概に多様性といっても、何でもかんでも認めればいいというわけではないんだと思いました。難しい問題だと思います。
	多様性の必要性を考えるという今まであまり考えてなかった内容で面白かった。
	多様性とは必ずしも良いことではなく、時と場合によって様々な在り方があるのだと思った。
	例その１の「戦闘状態にいる小隊」や「町の駄菓子屋」の例で挙げられたように、「多様性」が必ずしもよいとは限らないという論に納得がいった。「多様性」という言葉は耳ざわりがよいが、状況によって不要な場合があることを知った。
	多様性はあって良いものという認識でいたが、実際導入することを考えると多様性の必要性について考えることは色々あるのだということに気づかされました。
	コンティンジェンシー理論は多様性を考える上で、非常に重要であると感じた。ただ、多様にすべきだと言うだけでなく、本当に多様性が必要かを吟味することを意識したい。
回答	他の人がいいと言っていることでも、いちど立ち止まって考える癖をつけるといいでしょう。
質問	日本の小学校教育においてグローバル化、多様性は必要であると考えますか？
回答	他者に対する寛容を身につけるという点では必要だと思います。
質問	自分には、グローバル化という動きが、マジョリティがマイノリティの存在を認めるという程度のものに思えてならない。すなわち、国際的な場では圧倒的多数である西洋文化をそれ以外の文化が受け入れることで共通理解をし、西洋文化は他文化の存在を許可するだけにもおもえる。そう考えると、グローバル化とは何か、多文化理解とは何か。
回答	この意見はグローバル化の重要な面をついています。しかしマイノリティがグローバル化に対してどのように対応しているかも見る必要があります。
質問	町で長年やっている老舗和菓子屋のように、ごくドメスティックな環境であれば多様性は必要ないと断言していらっしゃいましたが、例えばその和菓子屋は”多様性”という概念すら知らないくても良いと思いますか？知っておいた上で、多様性を取り入れないという選択をすべきだと思いますか？
回答	知らなくていいと思います。和菓子屋の目的は、人々が喜ぶ和菓子を作って適正な利益を上げることです。このために多様性が必要ならば知る必要がありますが、必要ないならば知る必要はありません。
質問	迅速に意思決定しなければならない状況で多様性が必要ないのは納得できるのですが、その状況下では誰が意思決定をするのでしょうか。少なくとも、意思決定をする「誰か」は多様性について理解を持った人でなくてはならないと思います。（ナチスドイツがその例かと思います）
回答	その組織の目的によります。
コメントＥ	多文化共生が必ずしも良い結果を招くわけではないことを知った。老舗の和菓子屋の例が理解しやすかった。デトロイト市の例は、様々な国出身の人が偶然同じ地区に住んでいるように見え、他文化共生と断言できるのか疑問に思った。
回答	偶然同じ地区に住んでいるわけではありません。Residential segregation で検索すれば、なぜ同じ地区に住むのかについていろいろな論文が見つかります。

質問	コンティンジェンシー理論でドメスティックな環境やグローバルな環境の線引きはどこにあるのでしょうか。
回答	企業の場合は取引相手が国内か国外かで決まります。
コメント	ドメスティックなグローバルかについての判断が今後難しくなっていくのだろうと思う。
回答	その通りです。
コメント	「必要ない」と「使い物にならない」では意味が違うように感じる。「必要ない」から多様性に目を向けないのではなく、新たな可能性を見出すために積極的に導入していくことで、いざ必要なときに急な多様性の拡大が起こらなくていいのでは、と思った。
回答	「新たな可能性を見出す」必要がない組織も多数あります。
質問	同類原理の話が出たが、昔からのファンが新しいファンを攻撃する場合があるのはなぜか。
回答	これは昔からのファン、新しいファンがそれぞれ強い同類原理で結びついているため、両者をつなぐものがないからです。
コメント	ドイツではイタリアなどキリスト教文化圏から来た人はドイツ社会に入り込めるが、トルコなどのイスラム教文化圏から来た人は、トルコ人街を作ってしまうという。
回答	これは移民研究の重要なテーマです。それらの文献を読んでみるといいでしょう。
質問	多文化共生のデトロイトやチャイナタウンの例ですが、本当に多文化共生なのですか？ウェブで検索したところ、国土交通省によると「国籍や思想などの異なる人々が、互いの文化的な違いを認め、対等な関係を築こうとしながら、共に生きていくこと」とのことでした。異文化間の”つながり”が重要なんだなとわかりました。
回答	国土交通省の言うことが必ずしも正しいとは限りません。他の人がいいと言っていることでも、いちど立ち止まって考える癖をつけるといいでしょう。
質問	「多文化共生」が可能だと思われますが、デトロイトでもチャイナタウンの場合でも「同じ場所に生きる」ではないでしょうか？「共生」って、「相互関係」（「互利」、「片利」、「片害」など）が必要ではないでしょうか。
回答	共生概念を深く考えると、さまざまな多文化共生の形が見えてきます。
質問	保見団地のような小さい規模であれば、橋渡しとして日本語教育やお祭り開催などを行って効果があると思いますが、デトロイトやチャイナタウンのようにかなり民族・文化で大規模に離れてしまっているところではどのような具体的な橋渡しの方法がありますか。
回答	これはとても難しい問題です。なかなか解答は見つかりませんね。
質問	保見団地について一過去に様々なトラブルがあったそうですが、現在はどうなのですか？一ソーシャル・キャピタルの影響（効果）はどのようになっていますか？
回答	授業でも話したように、リエゾンとして機能する団体が出てきています。
質問	橋渡し型のソーシャルキャピタルが必要という意見がありましたが、保見地区のケース等において、両者を繋ぐ団体には白系ブラジル人、日本人、さらに内部の対立を防ぐような第三者が必要だと思います。（これは保見地区のケースだけでなく全体の多文化共生の問題に必要なことだとは思いますが…）この実現はかなり難しいとは思いますが、実現に向け何か具体的にやるべきことなどはありますか？俯瞰的な意見を聞きたく思います。
回答	NPO の活動が参考になります。
質問 I	日本人が橋渡し型社会関係を築くのが苦手な傾向にある理由は何なのか考察等ありましたらお聞きしてみたいと思いました。
回答	これは大きな問題なので、山岸俊男『信頼の構造』を読んでみてください。
質問	多文化共生という言葉が先行していて、具体的にどうすればよいか、今の問題点は何かといった前提の見直しがなされていないという意見に深く賛同しました。仲介者が入るといった提案をされていましたが、その方法にも限界があるような気がしました。もし教授自身が仲介者として接するとした場合、どのような点に気をつける（配る）べきだと思いますか？また仲介者がどのようにすれば良い形で多文化共生がなされると思いますか？
回答	公平に両者の言うことに耳を傾けることが大切だと思います。
質問 G	互いの文化を尊重しあう、真の多文化共生はそんなにも難しいものなのでしょうか。文化、というと生活と切っても切り離せないものなので、近くに存在していれば自然と受容し、共生へと変容していくような気がしました。拒絶しあってでもいるのでしょうか。
回答	パレスチナ問題を見れば分かるように、必ずしも簡単ではありません。

質問	留学生や外国人労働者に対して、そういう施設がありますということを知らせることも重要だと思う。逆に、日本人、特に外国人とのつながりを欲している学生をどう動機づけて動員するか、具体的な方策はどうお考えですか。
回答	国際センターにあるコーナーのような情報を共有する場所やウェブサイトがあるといいと思います。
コメント	多文化共生のためには政府主導の政策の他に、市民社会領域で行動することも必要だろうと思った。多文化共生をするために必要なサービスをまかなっていくためには、市民社会領域でニーズを補うことが（特に言語分野）難しいが一番やりやすいのかもしれない。
回答	NPO の活動が参考になります。
質問 H	「郷に入りては郷に従え」という言葉がありますが、その言葉に従うと、移民の人の文化と共生しているとは言い難いと思います。しかし、住民の感情を考えると、郷に従わせてしまうのは仕方がないというか、力学的なものに見えます。このように文化は維持か捨てるのかの 0 と 100 になりやすいと思うのですが、そうでない、上手く多文化が共生できた例はあるのでしょうか。
回答	あまり聞きませんね。
質問	ソーシャルキャピタルの築き方、築きやすさはどの程度遺伝するのか
回答	これは私の専門ではないので分かりません。
質問 I'	多文化共生を実現するためには、異文化を理解し、受け入れることが必要だと思います。その際に受け入れることに対する抵抗感などに国や地域による差はあるのでしょうか？また、差があるとしたら、どのような背景・理由によって、どのような差があるのでしょうか？私個人としては、島国は大陸にある国よりも受け入れに抵抗感があるのではないかと思います。
回答	私の感覚では島国と大陸の違いではないと思います。スカンジナビア諸国では寛容の程度が高いと思います。
質問	よく日本は地理的な理由（島国であること、稲作文化など）で、小コミュニティ内に閉じてしまう国民性があると言われるように思います。「橋渡し型」の関係性が苦手だといわれるのも、こういうところも関わっているのでしょうか。 日本人が”橋渡し”的なコミュニケーションが苦手というのは日本人だけの特有のものなのでしょうか。
回答	必ずしもそうではないと思います。
コメント	知っている人同士で固まりあまり外へコミュニティを広めようとしなかった人が日本では生存しやすかったのかもしれません。（広く浅くよりも、狭く深くが農耕で良かった？）
回答	興味深い論点ですね。山岸俊男『信頼の構造』を読んでみてください。

講義内容以外について	
コメント F	他文化共生と一口に言っても、干渉しないように共生する消極的なものと、盛んに交流して他文化の良さを認めあう積極的なものに分かれるのではないかと思う。
回答	その通りです。
質問	多文化と似たものとして、グローバル化及び自文化の保護はどうあるべきなのでしょうか。
回答	グローバル化は避けられないトレンドです。その中で自文化保護をすることはとても重要です。